



海老原家の系図

(一)

幕之内之事 桐之タウ
龜甲牡丹是ハ八幡太郎義家ヨリ下シ給フ
一文字ハカウホ子合戦之時立始依申タルニ祐堯ヨリ下給。
仁皇五十六代清和天皇六番ノ王子、

貞純親王
是ヨリ源氏始也
六孫王經基
多田満仲

頼光
鎮守將軍永保二年
頼信
頼義

義家
家腹にて総領タリ

義親
大裏女房ソツ御子、他腹ノ故家ハツカス
夫頼助、源平合戦時数ケ度高名依忠節頼朝ヨリ軍奉行仰蒙
其後薩摩国山戸郡雖庄下向。一谷ニテ太刀始備前ノ小嶋ニ
テ平家ノ兵打取重々依テ軍忠ニ海老原左京大夫頼助近江国
ヲ給ス。

為義
御子小野
義朝 日本国將軍タリ
鎮西八郎為朝
左京大夫頼助
是ヨリ海老原為トイフ字名ナリ

永意
為重
為満
為明
為吉
為里

加賀守為勝
太郎左衛門為頼

続く



海老原家の系図

(二)

十郎左衛門為繁

六郎太郎為用

カウ木子合戦ノ時太刀始ノ依忠節、一文字六郎祐ト云字祐堯ヨリ御赦免

美濃守為兵

加賀守為繼

加賀守為俊

清兵衛為信

宝徳三年ヨリ伊東江☆付清武ニ居住ス

近江守為美

肥前守為春

豊前守為保

和泉守為法

和泉粟土ノ城力戦ノ時亀沢豊前弟主水ヲ打取、其後永吉☆岳ヲ越敵ヲ可打ト長倉弾正殿同前ニ和泉先ニタレヲ越え候ニ薩州嶋津方日置周防放ツ矢ニ筋和泉股ニ中ル強手ニテタレヨリ外落ル、其時彈正殿ノ肩ニ掛其場ヲ去リ本陣ニ歸ル、疵百日程ニ平癒致候、夫故小越え陣ニハ不立申候。天正五丁丑年野村福永逆心ニテ日向没落身ノ置処無北河内工深隠レ居申候、嫡男助ノ丞出家致候。其後飢肥ヲ拝領和泉方工知行高百五拾石、助ノ丞年十九還俗シテ為信ト名乗、源藤崩初陣。百五拾石之内嫡子助ノ丞ニ七拾五石、羽右衛門方工五十石分ル、隠居分ニ二拾五石所持ス。

嫡子助之丞為信

続く

豊後守祐兵様高麗御渡海之時騎馬ニテ助ノ丞為信御供仕候。宮崎ノ陣助ノ丞給人ニテ罷立躰疵蒙ル、其後清武稲津掃部与力頭ニ勤仕候処掃部追罰之時落申候。釈迦生ケ野百姓吉五方ニ立退候其故知行上ル。嫡子助ノ丞為長百姓許ニテ出入。其以後隠居分二十五石助ノ丞為信ニ譲ル、其時分中小生座無之歩行ク座ニテ飢肥之代官役ヲ相勤ル、年五十二テ死ス、助ノ丞為長工跡式二十五石無相違仰付候。



海老原家の系図

(三)

助之丞為長

猪兵衛為園

助ノ丞十八之於御前同席、見台後免ニテ三略ノ講釈仕候。十九之年主膳様方御右筆御納戸二度御勤罷下。御使者番三十年勤其忠節ニテ中小姓座御免、細工奉行相勤ル、其後出雲守祐実様工御咄伽被仰付候共老躰故難成旨御断申上、御赦免被成候。助ノ丞為長隠居、治右衛門為盛方へ二十五石被仰付候。

女子横山氏の妻トナリ男子二人アリ

治右衛門為盛

江戸御供一度、京都御☆☆御上京之御供仕候。其以後酒谷地頭被仰付十五力年相勤ル。為盛り六十一ニテ役目隠居仕リ其後助ノ丞為貞方へ二十五石被仰付候。

為庵医師道屯田野ニ死ス

助之丞為貞

江戸勤五度ノ内三年詰三度、若殿様御部屋地旅勤ル、銀本二度☆可山形☆☆之丸御引出ノ節御部屋ヨリ直接相勤ル其以後客請取十年、記録方十一年相勤ル七十二ニテ隠居、治右衛門為円知行二十五石坐☆☆共ニ無相違被仰付候

源次郎早世

治右衛門為円

十八ヨリ執筆被仰付候。九年勤二十六之時御右筆稽古詰被仰付、二十七ニテ助之丞方へ被下置候、二十八ニテ江戸留守番ニ罷越死去。其年久吉出生、久吉幼年故門川相助弟市右衛門中継養子ニ来ル。市左衛門為美方へ貳拾五石之内貳拾石相続。

泉太夫為次早世

江島左衛門為美

続く

五十一歳ニテ死去仕喜右衛門未幼年故稻持作右衛門弟作治又中継養子ニ来ル、二十石ノ内拾五石相続。



海老原家の系図

(四)



作治為次養子

喜右衛門二十一歳ノ時作治死去仕、依之家督相續五石付
ラル。

喜右衛門為次

五十一歳ニ而死去仕助ノ丞幼年故拾五石之内二人扶持取
相續ス。

助之丞為吉

嫡子無之故和田本寿院二男貫助席違二而有之候得共母方
之血筋二付養子御赦免仰付候。助ノ丞為吉六十四歳ニ而
死去仕貫助為盛方へ二人扶持中小姓座無相違相續ス。

為盛勘助

鼎五為敬

鼎五拾六歳ノ時ヨリ連歌執筆相勤、二十一歳ヨリ御右筆
稽古詰相勤。二十二歳之時長防朝敵致候故、公ヨリ御征
伐被仰出当国ニモ長州へ出張ノ盛ニ付鼎五出張工相当り
居候得共出張相成不申、江戸品川駿州工御関所御番ノ時
ニ付御警衛、右筆ニ而出府詰越相勤ル、

氏名項目の途中に赤印がありますがその場所を
クリックすると説明が表示されます。

[keizu.xls](#)